

研究

横川先生と佐伯 (三)

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

(一) リアス式海岸(四)、山地について触れましたが、いざれもすばらしい眺めです。

おおむかし、豊後水道大陥没の際、海中に沈みきれずに残った山頂が、大島、大入島、屋形島、深島等の島となり、そして山陵の部分に、四浦半島、鶴見半島、岩護屋岬、宇土岬などの半島として存在しています。

これらの複雑多岐を極めた海岸線の展望台としての役目を果たしているのが、脊子山、元嶽山、仙崎山(以上蒲江町)、鶴見崎(鶴見町)、元越山、城山、秀岳(佐伯市)、尺間山(弥生町)などです。

海岸線・山岳のすべれた景観が、豊後水道の特色と言つても過言ではありません。

他方、漁獲の豊穡として知られ、全域に亘つて絶好の釣場が点在しています。

海中公園候補地として、屋形島のサンゴ礁は、新しい観光資源として注目されつつあります。

今回日、台地、三角洲などについて紹介いたします。

一、郷土の自然

(三) 台地

郷土には台地はほとんどありません。

もともと、上野村(弥生町)の小田、切畑村の小学校(弥生町)の切畑小学校(の裏)、直見駅(北)などに、よく目につく灰石の高台が少しはあります。いちばん見事なのは因尾村(本庄村)の日子の台地で、高さ百mに近い高台が、川に侵食されて、がけになつており、垂直な柱のような節理もみうけられます。

この灰石の高台の起源をご存知ですか。今日は、阿蘇山の熔岩が流れて来たものと考えられています。では、阿蘇山からの道を通つて、どんなにして流れて来たのでしようか。それは、沿道の山林を焼き払いながら逃げまどう動物を追い立てて、大進軍を続けた熔岩の旅を想像してください。

この熔岩は、重岡、小野市方面(宇目町)に、いつそうたくさんあります。たいてい、ロームという赤茶色の火山灰質の上の上のつています。阿蘇山は火山灰を降らした後にたくさん熔岩を流し、その後、活動が衰えたのではなれかと思われまふ。この時代には、日本に人間が住んでいたのでしようか。たぶん、まだ住んではいなかったと思ひます。思えば、おもしろい不思議な地球の歴史ではありませんか。

灰石の台地のほか、ロームの台地もおおざかりではあります。侵食から免れて残っています。海岸に近い西中浦村の松浦(鶴見町)や水之村(佐伯市)などでは、海抜五mから十mぐらゐら、いくぶん傾斜した地層をもつて堆積しています。たいてい隆起した後の侵食で、段丘のようになっています。

先づ(昭和三十三年)横川先生(現在別府大学教授)の発掘された上野田の下城(佐伯市)もこのような台地で

——下城遺跡發掘——

へ追つて昭和二十八年、下堅田の汐月から弘生式土器が發掘され、学界の注目を浴びました。現在、その土器の一つが、佐伯市立下堅田小学校に保管されていす。貴重なものす。

小野市・重岡では、高度二百二十加から二百四十加ぐらいの台地が、かなり広く分布してはいますが、中岳川上流の血内、悪所内では三百加ぐらいの高度になつていす。同じような口ムが、山の上にも、斜面にも發見されることありす。

私の考へでは、火山灰として山にも海にも降つた後、更に、浅い海や湖に堆積したものが隆起して、現在の台地となつたのではないかと思おれす。

重岡、小野市はよくまとまつた盆地ですが、三百加ぐらいの丘陵が広く分布してはいます。よく注意してみると、この丘陵もやはりもともと台地ではなかつたと思おれす。小野市の南田原では、特にこの台地の保存がよく、中岳川に降りる所では台地と山地とのけしきの移り変わりかゝるものに驚きます。

この台地面がすっかり利用されると、ヨーロッパのようになすばらしい畑や牧場になると思ひます。市岡川・田代川・中岳川がそれぞれ谷を掘つて、この台地を南に流れてはいますが、宮崎県付近では合流して北川となりす。

谷の深さは西の方ほど大きいかですが、地盤の隆起のせいと考へます。また、その合流する付近が深いのは、水の量が増して侵食する力が大であつたためでしょうか。

この付近の複雑な地形については、私もまつと研究したいと思ひます。

重岡村の蔽小野から小野市村の田代に於る途中の深い谷や、もとの台地が段丘となつて残つてゐるあたり雄壯なけしきは、このあたりでは、あまり見られなない珍らしいものだと思ひます。

(四) 三角州

郷土は山地に占められて、平野は少ないのですが、番五川と堅田川の下流には少しながら開けてはいます。上流の方では、川が蛇行した所に少しづつ平野があるだけです。

蛇行した川が岸をクレブへ削りとるために、岸に沿うて平野ができ、川はしたいにひどく蛇行します。これら辰川原木村、直見村(直川村)を流れる久留須川や、堅田川の青山と下堅田との境付近で見られます。

女島、長島などは辰川口の三角州です。中江川、落久志川、長島川、それに今はおおかた埋もつた臼坪橋の下に川も、馬場のどてに沿うた昔のほりなども、三角州に多い分派だと思ひます。

この三角州は今もどんどん伸びてはいます。城山に登つて、見事な三角州の發達を見たら、これは、しかし、あのいちばんいれを洪水のたびにできたことを忘れてはならないでしょう。洪水の時のあのだろや砂が、川口の島を造るのです。

しかし、長島や女島はへんに東北に曲がつてゐるではありませんか。洪水の時の水が灘山にあたるのか、蛇崎の裏の山にあたるのか、それとも長瀬の山ではねられて東北に方向を度えるためでしょうか。よその三角州にはあまり見られぬなびかたです。水の流れる不思議さを研究するのもおもしろいと思ひます。

同じ三角州でも、海岸部の山の近い所では、おもしろさが違つてきます。ゆるく傾いた石ころの多い、ふつ

う扇状地といわれるもの似てきます。石ころの下を水がくぐるので川床はたいへん水がありませぬ。中浦村(鶴見町)の羽根から東の鶴見崎半島には、このような扇状地はほとんどありません。海が深いので、なかなか埋めきれないのでしょう。

波の荒い浦代(米水津村)や名護屋村(蒲江町)の丸市尾では、この扇状地状の三角州のさきには砂丘があらうど入れ歯のようになっています。

中には、この砂丘が大きくなつて、内に潟を包んでいるものもあります。米水津村の開越や東上浦村(上浦町)の蒲戸はそれです。

また、東上浦村の津井、米水津村の田鶴音、蒲江町の東側では、潟が埋められて田畑になつています。平地の少ない海岸部では大切な土地でしょう。

波の働きで、砂をうまくよせて低地を造ることももう少し調べましょう。

下入津村(蒲江町)の州崎は、芹崎によせ左太平洋の暴浪が、入津湾の入口で静かに土地を堆積してでき、灰物です。

屋形島(蒲江町)では島の西北のすみ、両方からおよそ同じ強さの波が、土砂をよせて三角形の州鼻とよぶ岬を造っています。東京湾の富津の州のようです。これに島と潟が伴うと秋田県の八郎潟のようにもなるのです。

深島(蒲江町)では、州が二つの島をつないでいます。今は波のために削られましたが、昔はよい畑がその州の上にあつたそうです。(後略) 以上横川先生「御ま研究」より

近頃、浅間山(ニエニエ)が小・微噴火を続けて、活発な活動をしています。その噴火の歴史は古いものです。

なかでも、天明三年(一七九三年)の大爆発は、火山灰を利根川口の鉾子港まで降らし、特に、群馬県嬬恋村の鎌原(かんげら)部落を一瞬のうちに熔岩で押し流してしましました。

部落民四百七十七人は、溶岩流の犠牲となり、やっと九十三人が助かりました。生残つた人々は、それぞれ生活を立て直して村の再建をはかりました。

同地五で日、いまでも、毎月七日に念仏講を催して、浅間山の悲劇を語り伝えているそうです。

桜島は、鹿兒島湾に浮かぶ火山島でしたが、大正三年(一九一四年)の大噴火で、ついに大隅半島と地続きになりました。その恐ろしさを推し量ることができます。

さきほど、久住・飯田地域大規模農業開墾の一環として計画されている共同利用模範牧場の起工式が、玖珠町石築山で行なわれました。

昭和四十七年度から四十九年度までの三か年事業で、牧場を造成します。完成後は町営とし、妊婦牛、肥育牛を地内畜産農家へ供給します。牧場面積二百七十五畝。総事業費三億四千四百万円。

宇目町の台地面がすべり利用されると、ヨーロッパのような畑や牧場になると、横川先生は、二十四年前にその点を指摘されています。恐れ入ります。

更に先生は「長島や女島は、へんに東北に曲がっているではありませんか。よその三角州にはあまり見られないらびかたです」と指摘されていますが、これは、久留須川・井崎川を従えた番匠川よりも、堅田川・大越川、水立川合同の水流の勢いが、南東よりの暴風が助けを得て一層強かつた為、上流からの土砂が東北に押し流され

て堆積し、現在の姿になつたものと思われます。  
現在、番匠川、壑田川、いづれも一級河川として国より指定をうけています。

上浦海岸はリアス式海岸の特有な美しい景観をもち、広々とした砂浜は、海水浴に適しています。

近くの津井公園は桜の名所です。  
近年国道第二一七号線も整備され、定期バスが蒲戸まで開通されましたので、一日の清遊を試みるべき土地です。

間越海岸は五百メートルにおよぶ白砂青松で、亜熱帯植物ハマユウが咲き乱れ、すばらしい景色です。

きれいな砂丘でキャンプもできる別天地です。尚、宿泊施設としてのへき地集會場がもうけられています。

鶴見崎半島以南の海岸山地は、桜の名所浦代峠から元越山・神楽山・夷峠・場黒山にかけて、その分水嶺は海岸に接し、西流する川は、ゆるやかな谷となり、この山塊の傾動運動を物語っています。

反対に、海岸にはいる谷は、四隅内外で、その上急傾斜を打って、沖積地の形成は、多く扇状地の形態をとり、低地の耕地は、畑作としてサツマイモも表を栽培しています。

太平洋の波浪による小規模な潟や砂州の形成の例は、下入津の州崎、深島、名護屋の札市尾（以上蒲江町）などに見られます。陸形島で、砂州が二つの島をつないでいるのも、同じ現象によるものです。

波当津海岸は二隅におよぶ砂浜です。臨海学校、海水浴などに適し、以前は、大はまぐり採取でまきました。

昭和四十八年度の県予算に、観光調査費二百万円が計上されました。

(注)

灰 石 燄融状態で落下融合した火山岩片の集合。阿蘇山付近に多い。

熔岩 岩漿が熔融体または半熔融として、火山の噴火口から噴出したもの。また、それが冷却・凝固して生じた岩石。熔岩の本源たる熔融状態にある造山場質。高温で流動する。冷却・凝固すれば火成岩となる。マグマ。

火山灰 火山から噴出する灰のような物質で、熔岩の碎片の微細塵埃状のもの。

ローム 粘土に石英、雲母の碎粉や水酸化鉄などが混じり、筒状を呈する土塊。

海抜 海面を基準とした陸地または山岳の高さ。

段丘 河岸または湖海の沿岸に沿って階段状に発達した地形。河水、潮水、海水の浸蝕または砂礫の堆積によつて生じたもの。

三角州 河水が運搬した土砂が、河口に沈積して生じた三角形の砂州。デルタ。

扇状地 山頂の流水が、山麓の傾斜の緩やかな場所に出て、にわかには水勢を減じ、上流から運搬してきた土砂を堆積することによつて生じた扇状の土地。

(つづく)

(備考) 本誌執筆関係者の紹介

横川末吉氏 元佐伯中学校(鶴城高校)地理科教師、小冊子「佐伯の歴史」は佐伯研究の好手、手引書。

現住所 高知市鏡川町一(舊地)(郵便番号 980)